

宮城 社会 3.11大震災

<被災校舎の行方> 命考える場保存訴え

◎石巻・震災遺構を考える(6) 大川小卒業生

<日常生活に戻る>

部活動の柔道の調子が悪い。学校のテストはうまくいかな...

そんな悩みや不安があるのは、生きているからこそだ。東日本大震災の津波で被災した校舎を訪れるたび、そう実感する。

宮城県石巻市の高校1年只野哲也さん(16)は今年11日午後2時46分、同市大川小の5年生教室で黙とうした。同級生の男女15人のうち、6人が犠牲となった。

「小さなことで悩んでいては天国で、仲間に胸を張って会えない」。気持ちを奮い立たせ、日常の生活に戻る。大川小校舎は仲間への思いをはせる場となっている。

5年前の同じ時刻、5年生教室にいた。巨大地震の後、約50分間校庭にとどまった。避難誘導されるさなか、北上川から黒い波が向かってきた。必死に駆けだし、裏山をはい上がった。濁流にのまれ気を失った。

3年だった妹未捺さん=当時(9)=と母しろえさん=同(41)=、祖父弘さん=同(67)=を失った。

「一歩足を置く場所が違ったら自分も死んでいたかもしれない」。津波の恐怖が心に染み付くが、あの日の体験を公の場で語ってきた。「今後、自分たちと同じ思いをする人を出してはいけない」と願うからだ。

震災後に父英昭さん(44)らと大川地区を離れた。大川小で始めた柔道を石巻市内の中学、高校で続けてきた。現在の階級は100キロ。強豪校の部員約15人としのぎを削る。

学校生活で大川小が話題になることは少ない。卒業生として校舎の保存を訴える自分と、一人の高校生として今を生きる自分。2人の自分に葛藤する。

<悲劇背負い歩む>

時折、カメラで故郷の空を撮影する。校舎周辺の街は姿を消したけれど、自然は変わらない。同級生と泊まりがけで合宿したり、未捺さんらとふざけながら歩いて登校したりした楽しい記憶を思い出す。

震災が過去の出来事になりつつあると危機感を抱く。同じような悲劇がいつ起きるか分からない。只野さんら卒業生でつくる「チーム大川」は2014年春以降、校舎の保存を訴える活動を続けてきた。

メンバーの大学生佐藤そのみさん(19)は「大川小への思いを発信できている子どもは一握り。チーム大川の中でも本音をなかなか言えていない」と言う。

大川小をめぐるっては、心に深い傷を負い不登校になった子もいる。卒業生は少なからず、大川小の悲劇を背負って歩む。佐藤さんも6年だった妹みずほさん=当時(12)=を亡くした。

それでも、大川小校舎を残してほしいと願う。全国の小さな命を救う場、小さな命を考える場になる、と信じる。「大好きな大川小、大川地区について一緒に考えたい」。大川地区との関係が途絶えてしまった卒業生に、佐藤さんはそう呼び掛けている。

◇ ◇ ◇

東日本大震災で被災した宮城県石巻市大川小、門脇小の両校舎を残すのかどうか、遺族や市民の意見が割れている。保存を求める声、解体を望む人、または、そのはざままで揺れる思い。亀山紘市長は今月中に保存の可否を判断する。震災遺構について考える。(石巻総局・水野良将、高橋公彦)



被災した大川小校舎の前に立つ只野さん。「震災の記憶を風化させず、近い将来起こる災害で一人でも多くの命を救うため校舎は絶対に必要になる」と語る=2月7日

拡大写真

宮城 社会 3.11大震災

<被災校舎の行方> 痕跡伝えるシンボル

◎石巻・震災遺構を考える（7）門脇小卒業生

<思い出の品ない>

変わり果てた古里への郷愁と防災への願い。二つの思いを被災校舎に重ねる。

仙台市の仙台南高2年佐藤真歩さん（17）は東日本大震災の発生当時、震災遺構の候補に挙がる宮城県石巻市門脇小の6年生だった。保存と解体の間で地域が揺れる中、母校の保存を願う。

門脇地区に隣接する南浜地区に両親と弟の家族4人で暮らしていた。震災の津波で自宅は流失し、沿岸部の缶詰工場に勤めていた父正さん＝当時（52）＝が犠牲になった。

「住み慣れた家も優しくかった父も失った。残った思い出の品はほとんどない。校舎は学校生活を思い出させてくれる」

母親と祖父も門脇小を卒業した。石巻を離れた今、校舎は散り散りになった同級生も含め、多くの人とのつながりを確認できる大事な存在だ。

門脇小は震災で津波と火災に見舞われたが、300人いた児童のほとんどは教員の誘導で高台の日和山に避難して無事だった。真歩さんは弟と石巻高に身を寄せた。家族と連絡が取れず、3日目に母親と再会するまで不安な夜を過ごした。

仙台に引っ越して「星がきれいな夜だったね」という友人の話に驚いた。自分の過ごした3月11日の夜とは全く違う。震災についての感覚が内陸部と沿岸部で異なることを学んだ。

中学生のとき、広島市の原爆ドームを見た。教科書などで知ってはいたが、実際に見て原爆の怖さを感じた。言葉や写真でいくら説明されても分からないことがある。

「門脇小も津波の脅威や防災の必要性を感じる場になってほしい。見ることで、命を守る行動につながる人がいるかもしれない」

世代が若くなればなるほど、震災の記憶は薄れる。しかし、建物は後世に伝わる。

真歩さんは「地域の人がつらいと思うのであれば目隠ししても、移設でも、中央部分を残して解体してもいい。とにかく校舎を残して」と願う。

<「残し方に疑問」>

石巻高2年阿部桃花さん（17）も震災当時、門脇小6年だった。桃花さんも校舎の保存を望む。

昨年12月の修学旅行で、阪神大震災で被災した神戸市長田区を訪れた。ビルとビルの中の狭い道に、地震で崩れずに残ったというブロッコリー片があった。

案内してくれた現地の人は、大きな1枚のコンクリート壁が地震にも崩れず、一部を遺構としたと説明した。震災から20年がすぎ、その場所を訪れる人はほとんどいないという。「残し方に疑問がある」と現地の人は語った。

「神戸は復興し、震災の痕跡が分からなかった。モニュメントでは伝わらないことがある。門脇小は悲惨な姿になったが、震災を発信するシンボルになるはず。全部残してほしい」

◇ ◇ ◇

東日本大震災で被災した宮城県石巻市大川小、門脇小の両校舎を残すのかどうか、遺族や市民の意見が割れている。保存を求める声、解体を望む人、または、そのはざまに揺れる思い。亀山紘市長は今月中に保存の可否を判断する。震災遺構について考える。（石巻総局・水野良将、高橋公彦）



門脇小校舎の写真を見ながら、遺構としての保存が必要と語る佐藤さん

拡大写真

広域 社会 3.11大震災

<被災校舎の行方> 記憶風化させぬ「壁」

◎石巻・震災遺構を考える(8) 阪神大震災

<当初は姉も反対>

災害の痕跡をとどめる建造物を残すかどうか。1995年の阪神大震災の被災地でも、住民らの複雑な感情が交錯した。

兵庫県淡路市の北淡震災記念公園にコンクリートの防火壁が立つ。「神戸の壁」と呼ばれ、阪神大震災の数少ない遺構の一つだ。大火に耐え、神戸市長田区から移された。

壁の元所有者で保存に同意した山下都子さん(63)＝神戸市中央区＝が語る。「形ある物として残すことができ、今は良かったと思う。見る人の心を打つ力が映像や写真とは違う。理解のある方々の縁が繋がって保存できた」

95年1月17日。壁に隣接していた山下さんの実家を猛火が襲い、父浅吉さんと母としゑさんが犠牲となった。両親亡き後、焦げ跡が残った壁の所有者は山下さんと姉2人となった。「見ると涙が出る」などと2人の姉は保存に反対だった。

現地では震災前から再開発が計画されていた。「被災者の生活再建が優先。壁に何の価値があるのか」。まちづくり関係者からは、そんな声も漏れた。

山下さんの心は揺れた。「保存すれば、残す必要はないと両親に怒られるんじゃないか」。それでも、壁の保存活動に取り組む人々の熱意に突き動かされた。

「壁は震災の語り部。記憶を風化させたくないし、防災のためにも必要だ」。山下さんらは壁の公費解体延長を市に要請し、認められた。旧津名町(現淡路市)が受け入れることになり2009年、北淡震災記念公園に移設された。

山下さんは震災後、鬱(うつ)を繰り返してきた。不意に気持ちが沈み、寝込む。1月17日が近づくと胸が締め付けられる。

保存活動が元気の源でもあった。今では2人の姉も壁を残した意義を理解してくれている。

「悲しみを乗り越えるのは難しい。未来のために間違ったことはしていない、と自分に言い聞かせてきた。壁は今、多くの人に見てもらえる」

<心の傷癒えずに>

震災から20年がたった15年1月。コミュニティづくりを支援する長田区のNPO法人「まち・コミュニケーション」で震災体験を語ってきた男性が世を去った。寺田孝さん、75歳。震災で当時30歳の長女を失った。

長女がいたアパートは火災で焼け崩れた。長女の住まいが残っていたとしても、遺構の保存には「悲しみが鮮明になる」と否定的だった。

大切な人の死にかかわる震災遺構の保存・解体は、長く突き付けられてきた課題だ。

まち・コミ理事の田中保三さん(75)は「寺田さんは最期まで、娘を亡くした心の傷が癒えなかったやろな」と察して訴える。

「神戸では人の心など目に見えないものへの対策が手薄だった。もっと丁寧に気持ちをすくい取り、教訓の伝え方や遺構の在り方を考えるべきだったのではないかと」



東日本大震災で被災した宮城県石巻市大川小、門脇小の両校舎を残すかどうか、遺族や市民の意見が割れている。保存を求める声、解体を望む人、または、そのはざままで揺れる思い。亀山紘市長は今月中に保存の可否を判断する。震災遺構について考える。(石巻総局・水野良将、高橋公彦)



神戸市長田区から移設された「神戸の壁」。同じ公園内にある野島断層とともに震災を今に伝えている＝1月16日

拡大写真



拡大写真

<被災校舎の行方> 伝承へ残す価値十分

東日本大震災で被災した宮城県石巻市大川、門脇両小の校舎を震災遺構として残すかどうか、亀山紘市長は今月中に結論を出す。判断のポイントや伝承への思いなどを聞いた。

◎石巻・震災遺構を考える（9完）亀山紘市長に聞く

<避難という教訓>

—二つの校舎の保存意義をどう考える。

「大川小は津波で児童・教職員計84人が犠牲になった。今後の学校の災害教育に役割を果たす貴重な建物だ。門脇小は津波と火災で多くの犠牲者が出た門脇、南浜両地区に立地する。校舎にいた人は裏山の日和山に逃げて助かった。被害の大きさとともに避難という教訓を残す意義がある」

「両校舎ともに犠牲者を追悼し、伝承する遺構としての価値は十分にあり、同列に考えている」

—保存の是非の判断で重視する点は。

「住民や遺族の意見とコストの二つだ。大川小は住民団体『大川地区復興協議会』が保存を要望する。一方で、門脇小は住民組織『新門脇地区復興街づくり協議会』が解体を求める。昨年10月の市民アンケートでは意見が拮抗（きっこう）しており、広く意見を聞いて判断せざるを得ない」

「初期費用や維持管理費の問題もある。将来に負担を残さないでほしいとの意見が市民から多かった」

—どちらかの校舎は必ず残すのか。両方残すこともあり得るのか。

「二つとも解体はあり得ない。どちらかは間違いなく残す。判断の時点で全体保存か、解体して一部保存するのか、ある程度は踏み込みたい。両方の保存は財源の問題がある。一つの保存でも初期費用は億円単位。二つ残すなら相当の財政負担になる。国、県の考え方も聞いていく」

—庁内の震災遺構調整会議の報告書では、大川小について一部保存は詳細に検討していない。

「大川小は校舎が老朽化しておらず、耐震補強を必要としない。大川地区復興協議会が言う全体保存か、解体が基本になると思う」

—門脇小は南浜地区にできる復興祈念公園との関わりもある。

「有識者委員会は公園と門脇小の連携を示している上、公園は校舎を意識した施設配置にもなっている。判断は公園との関係を考慮せざるを得ない。一部を公園内に移設することも考えられるのではないか」

<先送りせず判断>

—保存の是非を年度内に判断するのはなぜか。

「門脇小は老朽化し、風化も進んでいる。保存するなら補強が必要で、早く判断をすべきだ。また、震災遺構の結論は、私が先送りせず判断すべきだ。震災から5年が過ぎると風化が進み、遺構は必要ないと思われる恐れもある」

—市民には時間をかけて話し合うべきだという意見もある。

「原爆ドームは判断を保留し遺構として残したという話があるが、戦後の復旧がほとんど進まなくて残っただけだと思う。今は時代が違い、どんどん復旧・復興が進む。震災の記憶も失われていく。残すべきものは早く残した方がいい」



東日本大震災で被災した宮城県石巻市大川小、門脇小の両校舎を残すかどうか、遺族や市民の意見が割れている。保存を求める声、解体を望む人、または、そのはざままで揺れる思い。亀山紘市長は今月中に保存の可否を判断する。震災遺構について考える。（石巻総局・水野良将、高橋公彦）



震災遺構に関するインタビューに答える亀山市長

拡大写真

